

誇りをだきしめて

村山 美和著

千書房

村山 美和 (むらやま みわ)

1965年生。11才で詩を書き始める。朝日新聞等に掲載されるが、詩作だけにとどまらず、いろいろなことに挑戦。3年前から一人暮らしをはじめて、通信制の大学の学生、障害者団体の役員でピアカウンセリングもこなす。1995年8月には、エッセイ集「あんどーナツ」を七七舎（筒井書房発売）から出している。

初出一覧

- 夢 (34頁) 朝日新聞埼玉版
抱いていたもの (42頁) 毎日新聞
選択 (48頁) 毎日新聞
TEL (57頁) モロゾフ第4回愛の詩コンクール特賞、一九九〇年
海岸線 (63頁) 毎日新聞
かたち (79頁) 朝日新聞
明日の町 (85頁) 朝日新聞埼玉版「埼玉文化」一九九三年度正賞受賞
および
「誇りをだきしめて」の章 (89頁～124頁)、一九九四・八～一九九六・四
『ふくしさいたま』（埼玉県社会福祉協議会発行）に連載

誇りをだきしめて

発行日	第一刷	1997年2月10日
	著者	村山美和
	発行者	千田好夫
	発行所	(株)千書房

〒140 東京都品川区大井5-4-17

TEL03-3775-8873 FAX03-3775-9464

ISBN4-7873-0025-3

¥1165-

誇り



め

村山
美和

千書房

もくじ

まえがきにかえて 4

書けないことば 7

まなざし 17

ひとつの夢を 33

手をのばしたら 49

明日の町 69

誇りをだきしめて 89

あとがき
125

まえがきにかえて

「詩をかいてみなよ」

11才の私に、ある日友人が言った。言葉を並べると、彼はとてもほめてくれた。私の声が彼に届きますように。「やつと詩集が作れたよ。いろいろありがとう」

人にはいえないことも、詩にすることは可能だった。だから書き続けることができたし、書くことで自分を取り戻していた時期も確実に存在した。

私の詩は、決してロマンチックなものではない。生活のあちこちで飲み込もうとした小

さな言葉たちを集めたものだから。

現在、私はあまり詩を書き溜めてはいない。きつと今の私は、感じたことを声にするすべがすこしだけうまくなって、比較的ものを言いながら生きているのだろう。

詩集のために過去の自作の詩を読む、あまり詩を書かなくなった現在の私。「そろそろ書く時期だね」と話しかけてくる心もある。そうか、もうそろそろ書きたがっている部分もあるんだね。時間をつくるよ。

叫んでいる私が詩の中にいる。
少し気恥ずかしく、いとおしい。

村山美和

書けないことは

ある心

明日

ベージュのニットスーツを着こなして
女友達と語り合う

通過していく情報を

いとおしむも悲しむも

胸深い場所でおこなわれたらしいこと

詩よ あなたは

一人あるきしながら

彼女たちに語れない
ある心を

密やかに覚えていて

今が

体の硬直が激しくて

薬ばかりすすめる家族の前で

満足に食事も出来ない日

薬はあまり飲むんじゃないと

本気で言ってくれた人

東京に行きたいと悩んでいたら

一緒に行こうと

計画を立ててくれた 車椅子の友人

弱い精神をさらけ出し

みにくい心を隠さずに

はだかでつきあえる人達の中

追いつけない夢に焦っているけれど

今が私の

幸福な時代なのかも知れません

だれも私を信じないなら

好きなものは青い空

九月にただようきんもくせい

旅先のうるおったぬくもり

だれかが私を嫌っていくなら

そつと泣きはらして

思い出の刃先が痛くても

もつと私を好きになろう

だれかが私を忘れていくなら

そつと思いを埋めて

抱かれた残り香が離れぬぶんだけ

もつと私を好きでいよう

もうだれも私を

信じないなら

それでもあなたは幸せになるのよと
歩くことに言い聞かせよう
休みなく行く勇気をもって
私は私を信じよう

たんぽぽ

空き地いっぱい わたげ
ちよつと定員オーバーじゃない
あんたたちのアパート

こんな南風の強い日には
どこまで飛んでいけるのかしらね
太平洋を渡りたいって
銀河系を抜け出したいって

大きな夢 持っているのね

ねえ もし水平線が見えたらさ
星の川を見下ろせたらさ
あたしが今 こっそり落とした
涙 おいてきてくれないかなあ

誰にも見つからないようにそおと
さ

自己主張

私は真実

何もわからない

心の奥で欲しているもの
生きる全て

ほしいものはなんですか

やりたいことはなんですか

すみません　そういう質問

耳慣れていないもので

解読不能なんです

自分で出来ることは限られていたし

与えられる物ばかりで窒息していたし

しては　いけないことが多かったし

何よりも私は　いいこちゃんだったもので

ほしいものはなんですか
やりたいことはなんですか

それでも詩を書いてるなんて
おかしい奴

ふりこ

心と心のつなぎめに

目立たぬ色彩をそなえて

常にぶら下がっている

『きっかけ』のふりこは

明日を夢に見ながらも

己の貧しさにたえられず

泣くにも泣けない日々の中で

それでも とぼうとする 鳥にだけ

その色を視界に放ち

激しく揺れてくれるのだ

今 踏込めと